その音は深く、締まりがあり、統制がとれ、しかもゴージャス！

ロンドンからの手紙 volume 26

Letter from London

Text by Ken Kessler
Translation by Miyuki Aoki

プリメインアンプ

EAR V12

¥942,900

Specifications
●出力：50W+50W●入力：RCA５系統●テープ出力：１系統●出力ダンピングファクター：10●S/N：93dB（＜0.4mV）●入力感度：400mV●インプットインピーダンス：47kΩ●アウトプットインピーダンス：４Ω、8Ω●消費電力：200W●外形寸法：420W×135H×440Dmm●重量：22kg
■カタログ請求先：
〒443-0005 愛知県蒲郡市水竹町上大塔49-1
ヨシノトレーディング(株) TEL.050-3375-3975

V20そっくりだが内容は一新

名車ジャガーにインスパイアされたあのV20が、装いも新たに帰ってきた。EARの創立者にして社長兼デザイナーであるティム・デ・パラヴィチーニは、プリメインアンプV12について「まったく白紙の状態から設計した」と語っているが、これはどう見ても前作V20にそっくりだ。まったくの父親譲り、というか、寸法も外観も同じというのは混乱の元だ。「前のと一体どこが違うんだい？」と尋ねても、ティムの答えはこうだ。「まぁね、何から何まで手直ししたんだけどね」。

ここで、新作V12を語る前に、昔のカタログを見て前作V20をおさらいしておこう。皮肉なことにV20の名前はもともとV12をイメージしていたのだ。なぜなら、このアンプの外観は車マニアでもあるティムが、とりわけ名車ジャガーXJ12のV12エンジンにインスパイ

アされたものだからだ。最初の試作品では、ティムは12本の出力管を使い、V型エンジンのカム／バルブ・カバーを思わせる外観に仕立て上げた。このアンプが一部でV12と呼ばれたのもごく自然な成り行きだった。

しかし、今回紹介するV12の登場までこの名前を公に使わなかったのは、ティムが当時、全く新しい回路を開発することを決心したからである。結局そのときは、傍熱双三極管ECC83を片チャンネル当たり10本、計20本使用したので、名前もV20となっていた。真空管の全体構成としては、さらに6本のECC83／12AX7と4本の12AU7を使い、片チャンネル当たり出力20Wを達成していた。出力管の動作はA級プッシュプルで、同社のEAR859三極管シングル・アンプやEAR861三極管プッシュプル・アンプにみられるエンハンス・トライオード・モードを採用している。

これらのアンプに共通する重要なポイントは、ティム独自の平衡ブリッジ・モードによる超広帯域出力トランスの採用と、無帰還方式である。また、信頼性と入手のしやすさを考え、どこにでも転がっている真空管を使うこともティムのこだわりであり、この点でECC83ほど豊富に存在している球はない。そして、四角い箱だけ、あるいは「トランスが後ろ、球が前」といったありきたりのデザインが多い中、ひときわ目を引くモデルが、前述のような車への憧憬から生まれた。

あくまでもティム個人の感覚で外観が「アグレッシブになり過ぎない」ように、底面形状こそほぼ正方形としたものの、その上の造作物にはカーブを付け、今までの真っ平らな表面、むき出しの管球群、いかにも工業製品的な黒っぽいトランス群が林立、といった風情とは一線を画するものにした。こうしてV20は（新作のV12も同様だが）、バナナ型のクロムめっき仕上げ真鍮製フェイスプレート、互いに反対方向に傾斜させて並べた左右チャンネルの管球群、まるで作物を守る温室のような湾曲した金属メッシュによる管球保護用ボンネットを備え、クロム、木目調、艶ブラックの配色でアクセントを効かせた、これまでに無いルックスを持つにいたった。

しかし、ティムはさらにその先を見据えていた。「もっと低域の座った、高音質で、片チャンネル実効最大出力50W、真空管の寿命の長いアンプを作りたかった」。彼は語る。「V20の設計を踏襲しながらも、回路やメカの細部は手直しし、しかも同じ製品ラインとしてのクオリティーは維持した。変えたの真空管の本数だよ」。ティムはV20では計30本使っていた真空管を、V12では10本のECC83と、12本のEL84出力管（片チャンネル6本）に変更した。こうして、V12の名前も復活できたのだ。

さて、このアンプ。出力管としては傍熱五極管を用いているが、相変わらずA級パラレル・プッシュプル動作を採用している（ただし、五極管モード）。もちろん、平衡ブリッジ・モードとオリジナルの超広帯域出力トランスと無帰還のコンセプトは健在だ。ライン入力は5系統用意されており、このうち「PHONO」の表示のある1系統にはフォノアンプが必要である。一方、出力系統はテープデッキ用の端子（1ペア）のみである。

ティムは、スピーカー端子を後部上面に配した。スピーカーケーブルは、バナナプラグなら上から真っ直ぐ挿せるし、裸線（またはピン）なら背後から挿せる。端子は6個が1列に並んでおり、スピーカーのインピーダンスに応じて4Ω用と8Ω用が別々に用意されている。端子群の手前には保護用のクロムメッキ仕上げのバーを設けた。

操作できる箇所は3カ所のみ。今やEARのシンボルともなったオレンジ色の電源スイッチ、ボリュームノブ、それに回転式のソースセレクターだ。うれしいことにセットアップはいとも簡単だ。気を付けたいのは22kgの重量と、420（幅）×440（奥行）×135（高さ）㎜の寸法だけ。本機は極端に熱くはならないが、本体の上方は十分に換気することが望ましい。

機器やソースのアラまで描出

イーテルのスピーカーケーブルでV12をウィルソンSophia3につないでみた。主な音源機器はミュージカルフィデリティーのDAC／トランスポートkW DM25で、これもイーテルのケーブルで接続。さらに、アナログプレーヤーSME20／3、アームはSME Series V、カートリッジは光悦「Ur ushi（漆）」、オーディオ・リサーチのフォノステージPH5を用意し、こちらはキンバーケーブルHeroで接続した。

私の聴いたV12はまだ新しかったので鳴らし込み不足を心配したが、一聴してそのパワーとコヒーレンス（一貫性）の高さを感じた。それでもエンジンがしっかりとかかるには多少時間が要るように思われたので、気合いを入れて試聴する前に72時間、慣らし運転を行った。甚大、とまでは言えないがその差異は明らかで、特に低域の滑らかさに差が現れた。組み合わせる機器や試聴ソースのア

ラまで描き出してしまうかのようなディテールの細やかさ、精度、統制感がEARサウンドの特徴だ。

その最も良い例がkW DM25DACの管球出力、またはトランジスタ出力から信号を受けた場合である。普段、私は管球出力の方から先に聴くのだが、今回はなぜか自分でも分からないがトランジスタ出力の方から先に聴き始めた。サウンドは一聴してやや温か味に欠け、非常にシャープだが、ボーカルはどこか薄い感じだ。V12はどうやら、音源機器の弱みをそのままさらけ出してしまうようだ。

リマスター盤『バンド・オン・ザ・ラン』のオープニング曲を聴いてみる。このアルバムタイトル曲には元々特徴的な鼻音があるが、変化に富む重層的なテクスチャーをこのアンプがどのように扱うかが聴き所となる。ポール・マッカートニーの声は滑らかだが、この曲ではほとんどミュートが掛かっている。一方、シンセサイザーのむせび泣き、攪乱するベース、スローなドラムと手拍子、アコースティックギターと騒々しいエレキギターは、広々としたステレオ音場の中できちんと分離する。どんな音の個性の強い機器たちにに対しても「さあ、かかって来い！」という感じだ。V12のマジックは、リスナーの望むとおりのアイソレーションを実現してくれることだ。リスナーがサウンドのどの部分に注意を傾けたとしても、全体としては常に完璧なコヒーレンスが保たれている。

ここで私は、自分が最近抱いている脅迫観念のことを、ふと思った。テレビ番組「フード・チャンネル」をどうしても見なきゃ気が済まないのだ。自分が筋金入りの大食漢（ただし、美食家と云えるほど洗練されてはいない）であることはさておき、私は彼等の符丁のような言葉遣いに魅了されている。それに比べると、オーディオ愛好家の言い回しは、まるで会社の顧問弁護士が政治家にウソをつく時に使う言葉のように事細かだ。その番組の出演者の言葉はまったくもって恥ずかしくなってしまうほど曖昧で、そのボキャブラリーの少なさときたら5本の指で数えられる程度。さて、ここで問題は、1枚の皿に盛られた無数のフレーバーをいかに表現するかだ。これがV12の話とどうつながるのかというと、このアンプは、まるで肥えた味覚をそっくり聴覚に置き換えるかのような働きをするのではないか、と思えたからだ。

オーディオ界の物書きには、たくさんのフレーバーを「音色」の一言で済ませるような勇気のある者なんていない。裏返せば、我々にはこぞって「プラムの様な低域」とか「チョコレートの様な中域」などと散々言ってきた罪がある。私の場合、複雑に音が入り組んだ録音をV12が描写する様子を説明するのに、洒落たレストランで開かれている試食会を取材するのと表現がどうしても似通ってしまう。ここはひとつ、私の好きな「食材は3つで十分です」的なイタリアン・シェフの切り口で、ブイヤベース、いや、複雑なサウンドを紐解いてみよう。

音楽へのリスペクトを感じさせるアンプ

まず、イギリスのプログレッシブ・ロックバンド「キャラバン」のヴィオラ奏者、ジェフ・リチャードソンと近年、旧交を温めているのを記念して、「Golf Girl」「In The Land of Grey and Pink」その他の曲を（後ろめたい気持ちで）棚から掘り出してきた。いずれも、大昔に若気の至りでやっていた葉っぱでも吸わない限り、二度と聴くことはないだろうと思っていたような音楽である。当時、プログレ・バンドにとって、複雑さは意表を突いた楽器の使用と同じくらい「マスト」な物だった。此方にトランペット、彼方にフルート、そして圧倒的な量のサウンド。聴き分ける私も真剣勝負だ。これまで忘れていたが、Deccaレーベルから発売された彼等の作品がこれほど素晴らしい録音だったとは！ レコーディングスタジオのモニターシステムから音がでていると錯覚するほど、V12は聴く者を演奏の奥深くへといざなってくれる。

40年間、常に彼等の心の内を理解しようと努めてきた訳ではないが、

背面もいたってシンプル。IEC電源プラグ、ヒューズホルダー、ライン入力用のRCA端子群（フォノ入力にレコードプレーヤーをつなぐ場合はフォノアンプが必要）。直立しているスピーカー端子は、バナナプラグと裸線のいずれにも対応する。

彼等がV12で描き出されるような音のタペストリーを織り上げようとしていたことは想像に難くない。キャラバンと同じ傾向のカンタベリー系バンド「ソフト・マシーン」も聴いてみたが、彼等の楽曲の複雑さ、刻々と変化する音のテクスチャーが決して濁ったりごちゃごちゃに混ざることはなかった。しかし何よりも驚いたのは、プログレの世界で過剰に追求されている程ではないにしても、同じ類のコヒーレンスがずっと音数の少ない録音でもきちんと感じられたことだ。例えば、たまたま手元にあったCD、『Black Sabbath: The Secret Musical History of Black-Jewish Relations』から、ビリー・ホリディの1956年のモノラル録音で「My Yiddishe Momme」を聴く。

ここに存在するのは、ビリー・ホリディ本人、1台のピアノ、そして数名の友人だけ。オーディオ的に華々しいものではなく、発売する意図もなかったプライベート自宅録音である。だが、V12が描いてみせたのは、部屋の真ん中に雲のようにぽっかりと浮かぶ音楽、霧の中を遊泳しているような体感を伴った音楽だった。決してシャープではないがリアルなのだ。V12のマジックがどんなものであるにせよ、録音にアラがあったとしてもV12はそれを暴くのと全く同じくらい巧妙に、リスナーにそのアラを忘れさせてしまうのだ。このことに気付いて私は狼狽してしまったが、とりあえずV12はリスナーを縛りから開放してくれる。

同じCDから次に、テンプテーションズが1969年のライブで歌った「Fiddler On The Roof（屋根の上のヴァイオリン弾き）」のメドレーを聴く。元気いっぱいのブロードウェイ版で、熱の入ったドラム、パンチの効いた金管、オーケストラの音塊、そして何よりも素晴らしいのはライブを楽しんでいる聴衆だ。やや大仰な「If I Were A Rich Man（もしも金持ちになれたら）」から一転して物静かで思索的な「Sunrise, Sunset（サンライズ・サンセット）」へ。V12の動作は、あたかも同じ名前のエンジンを載せた名車のギアチェンジさながらに滑らかだ。

繊細さと力強さ、あるいは威厳と優雅さとをバランスさせるV12の性能がおそらく最高に発揮されたのは、同じくCD『Black Sabbath』より、伝説的歌手ジミー・スコットのトラックだ。よく女声に間違えられる彼のハイトーン・ボイスが「Exodus（栄光への脱出）」のテーマを切々と歌い上げる時、あなたも胸がキュンとなるに違いない。バックのオーケストレーションは控えめなので、この荘厳さはもっぱらボーカルが醸し出しているといえる。

スピーカーSophiaを通してこの「唯一無二」の歌手のニュアンスを細部に至るまで描き出したのは、V12の透明度と抜けの良さのおかげである。ゴージャスだが決して出しゃばりすぎないストリングス、控えめなベース、そこはかとない響きのパーカッションやピアノ。オーディオ愛好家なら試聴リストのトップに入れておきたい一曲だ。V12は、まるでこの曲を再生することを光栄で名誉なことだと感じている風である、つまり、音楽へのリスペクトを感じさせるオーディオ機器なのだ。

BOX OUT

トランスがすべて

「出力トランスはアンプの性能を決める」。ティム・デ・パラヴィチーニという男は、この一点に関しては非常に頑なだ。彼は自身を「超アンチ・トロイダル派」と称し、アンプの性能を重さで測っている。重さイコール内蔵トランスの物量の目安だからだ。「845や2A3を出力管に使っている中国製の軽いアンプ、低域が出ないことは手に持っただけで分かるね。アンプ作りに王道なんて無い。コイツらだったら70ポンド（約32kg）くらい無けりゃ、いい音は出ないね」。このことは、EARの製品群のみならず、彼が手掛けたクオードの製品についても当てはまる。

例の手巻きの自社製トランスについてティムに尋ねたところ、彼の答えはまるで、ブリスケットに摺り込むドライラブ（訳注：肉の下味を付けるためのミックス香辛料）の秘伝のレシピについて尋ねられたシェフのようだった。「ベーシックなEIコアに、特別な巻き方と積み重ね方で銅線を巻いている。銀線は使わない。積み重ね方と巻き線の配置が肝だね。これがわかってるメーカーは、ほとんど無いよ」。

415 Word Verdict

| すべての文章を読みたくない方のために |

あなたがこれまでにEARのアンプを使った経験があれば、その低域を聴いただけでもすぐにパラヴィチーニの設計だとわかるはずだ。その音は深く、締まりがあり、統制がとれ、そしてアマローネ辛口（訳注：イタリア・ワインの銘柄）のようでいて、それを補うウォームな中域のおかげであくまでも管球らしい。ドライブ力に関しては、Sophiaとの相性はツナ＆マヨみたいにピッタリだ。球がぎっしり詰め込まれているが、非常にコンパクトにまとめられ無駄がない。しかも、にじみ出るゴージャス感。私に言わせれば、これもある種の統合失調症だ。

Ken Kessler

ケン・ケスラー氏は20年以上もハイエンド・オーディオについて執筆活動を行ってきた。生まれはアメリカだが、現在は英国に住み、英「Hi-Fi News」誌の編集協力者としてさまざまなオーディオ記事を寄稿している。彼はまた、米「Stereophile」誌をはじめとして、世界各国の数多くの雑誌にも執筆中。最新著に『McIntosh"…for the love of music…"』がある。